



夏から秋へ

「秋の野に咲きたる花を指折
かき数ふれば七種の花」

(山上憶良)

憶良は、「秋の野に咲いている花を指折り数えてみると、七種類の花があります」と詠っています。

残暑の続く中、各地からハギやススキ、オミナエシなどの便りが届くころです。7月ごろから咲いているキキヨウは別格としても、晩夏から秋への移ろいを刻々と映し出すのが秋の七草です。秋の花はどこかに陰を宿しているようです。

ワレモコウの暗赤色はもとより、キキヨウの青、オミナエシの黄、ヒガンバナの真紅でさえ、花のにぎわいは内に秘めて、涼しくひそやかな姿を醸し出しています。

百花繚乱で浮き立つような春の野ではなく、切なく花が揺れる秋の野を、古来、日本では「花野」と呼んでいます。

先人が積み上げてきた日本の季節感は、驚くほど繊細で深く心に残ります。

桜に象徴される、春の野は成長と繁栄の宴となります。花に身を委ね、浮かれて酔いしれる一方で、春憂という言葉にもあるように花の盛りには物思いにふける季節でもあります。

春と比べて夏の暑さや光も送り出す寂しげな秋の野に、去りゆくものの華やぎを見ようとすると時もあります。

秋の花野を彩る花の数は、決して少なくありません。「秋の野に乱れて咲ける花の色千種にものを思うころかな」(紀貫之)。

春の七草に比べて、花をめぐる秋の七草の方が充実感はあるように感じます。山上憶良は秋の七草をこうも詠んでいます。

「萩の花／尾花／葛花／なでしこの花／女郎花／また藤



袴／朝顔の花」ここでいう朝顔とはキキヨウのことです。お彼岸の頃に咲くヒガンバナは「曼珠沙華」とか「天上の花」とも呼ばれています。

また、韓国では、葉のあるときには花はなく、花のときは葉がないことから花は葉を思い、葉は花を思う：「相思華」と呼ばれているそうです。

黄金色に実った稲穂。傍らに咲く真紅のヒガンバナ…。美しい日本の里山が、実りの秋を迎えています。最近、身近な野には外来植物が多くなりましたが、秋の七草にどれだけ出会えるか、野山の散策に出掛けたいものです。



指宿市長
豊留悦男